

ル・クレジオがこんなことを書いている

高橋 純

ル・クレジオがこんなことを書いている。

『タラウマラ族の国への旅』が考えられたのはそのころ、この夢の只中で、おそらく一九三六年八月の終り頃だろう。ところでアントナン・アルトールは本当にタラウマラ山中に行つたのだろうか？ メキシコ滞在中のアルトールと交流があつた最も忠実な証言者であるカルドーサ・イ・アラゴンは、この頃、メキシコ国立自治大学美術科によつて組織された人類学公式調査団——現在の国立人類学博物館はまだ存在していなかつた——について語り、アルトールがこの調査団といつしよに山地に向つて出発したと明言している。だが、不思議なことに、公文書館には、この調査団の形跡は見当たららず、美術科の主任教授はアルトールという名前は記憶にないようである。だからもしアントナン・アルトールが本当にタラウマラの地に行つたことが疑いない事実だとすれば、彼は一人で行つたか、もつと正確にいえば公式の援助なしに行つたということになるだろう。この問題の難しさは大きい。この頃、チワワールクレール行の鉄道は確かに動いていたが、峡谷の奥のノロガチクに到達するには

幾多の困難があつた。アルトーは病気で、麻薬によつて体力は弱まっていた。その上、スペイン語もタラウマラ族の言葉も話せなかつた。その頃、ノロガチクではタラウマラ族の大部分の村々はイエズス会布教団の庇護の下にあつたから、異教の使徒に他ならないアルトーがどのようにしてインディオと意思疎通ができたか、少なくともペヨトルの儀式に立会うことができたのか不明なのである。」(J.M.G. Le Clezio, *Le rêve mexicain*, Gallimard, 1988, p.223)

また山口昌男はかつてオクタビオ・パスとこんなやり取りを交わしたことがあつたという。

オクタビオ・パス：君「山口昌男―引用者注」は「アントナン」アルトーのタラフマラ紀行を幻視による理想的民族誌と言うがそれはある意味で正しいね

山口昌男：どういう意味で？

パス：彼はメキシコへ通信員として来たことは確かだけど、タラフマラ族の住んでいるシエラ・マードレに行ったという確証は何もないのだよ。人類学者の陥りがちな現地至上主義という経験の物神化との対比において幻想であれだけの物を書くのだから素晴らしいと思わない？

山口：あなたの言うことに俄かに同意できないけれど、それが事実であるとアルトーが更に素晴らしく見えてくるような気がしますね。私はどちらかと言うと、こういう奇怪な事実のほうが好きなのがあるのですが……

「と私は反応したが、しばらくの間ショックから立ち直ることはできなかった。」

(山口昌男「オクタビオ・パスとの日々——その死を悼みつつ」『群像』一九八八年七月号)

これはいったいどういうことなのか。アントナン・アルトーは一九三六年にメキシコに赴き、その原住民タラウマラ族の儀式に立会った事が彼の言語観、演劇観に決定的な影響を与え、その後彼は死の直前まで自らの「タラフマラ体験」を反芻し続けることになり、その成果は一冊の本にまとめられてわれわれ読者の手に残されている。ところが、彼が一月六日にパリを発ち、十月末日にフランスに向けてベラクルスで乗船したというそのメキシコ旅行の期間は裏が取れているのだが、その間にアルトーが本当に原住民タラウマラ族に出合うことができたのかとなると、彼の軌跡の詳細を辿るほどに疑わしくなってくるのだ。

もしも、こうした疑いは悪意ある勘ぐりに過ぎず、実際にアルトーがタラウマラ族と出会い、その儀式にも立会っていたのなら、タラウマラについて書かれたアルトーのテクストは自身の体験の報告とそれについての省察であるという単純な構図は変わらない。しかしもしも事態が逆であり、アルトーは遂にタラウマラに出会うことがなかったとしたならば、彼にとつての生涯のこだわりであるこのメキシコ原住民は何者であり、それについてアルトーが生み出したテクストは読者にとつて何を意味するのか。

経験の報告としては偽りの情報である。さらに言うならば、実際には自分が遭遇したわけ

ではない原住民との交流をアルトーが自らの体験として語っているならば、彼は嘘をついていることになる。つまりテキストが伝えるのはでっち上げの経験にすぎない。そうした虚言を弄するという危険を彼は自覚していたのだろうか。その自覚があったにせよ、なかったにせよ、アルトーはなぜ、死の直前まで「タラウマラ」にこだわり続け、(内容は雑然としているとはいえ)これに関するテキストを繰り返し書き、推敲し、後の読者に残したのだろうか。

人の経験は言語化されなければ他者に伝わることもなく、自身に対しても形あるものとして残ることはない。逆言すれば、言語化という形を得たものはそれ自体が書き手・読み手の経験となる。もしもアルトーがタラウマラに出会っていたのが事実であったのなら、彼はその経験を言語化しなければ他者(自身を含めた読者)と共有(自身にとつては回収?)できないのは無論のことだ。もしも彼がタラウマラと出会うという事実がなかったのなら、彼はやはり、タラウマラという名に特権化された根源的世界の住人との遭遇という経験を、ヨーロッパ世界に戻った後にも、テキストの産出(言語化)を通じて、死の直前まで、求め続ける以外の生き方は出来なかったのだろうか。

アルトーの一読者としての私の理解は後者に傾く。ル・クレジオが、冒頭に引用した同じエッセーの中で、私からすると共感と同時に幾分かの同情を込めて、「アルトーの体験の真実性を問うことは意味がない」と言い切る気持ちが良く分かる気がするのだ。